

「ホーム」とは何か？

東京外国語大学大学院総合国際学研究所
ファスベンダー・イザベル

実は、このエッセイで何を書けばいいのか長い間、思い悩んでしまって、言葉がまったくやっ
てこなかったの、切をかなり押してしまった・・・。何となく、今までの、自分の日本での
経験について書きたいと思い初めは筆をとった。決して難しいテーマではないはずだけれど、自
分の今までの日本での経験を、なぜか、なかなか言葉にできない。このエッセイを10回ぐらい
書こうとしても紙の白さに変わりがないのはなぜ？

おそらく私が日本にいるということ自体、「留学」という範囲を大幅に越えてしまった気がする
からではないだろうか。日本とは私にとって一体何だろうか？と思ってしまう。今までの日本
における経験について再考察すること、それは自分の「ホーム」はどこにあるのか？という自分
のアイデンティティを考える、とても難しい問いにぶつかる。だから簡単に言葉にはならなかつ
たのではないかと今更ながら気付いた。

一方は、日本に「ゲスト」として滞在するという新鮮な気分はもうまったくない。そして、出
身地であるドイツに一時帰国する際には、毎回カウンター・カルチャーショックが大きく、自分
はもうその土地の人間ではない、言語にすら自信がないという不思議な気分になる。友達と話す
ときに急に日本語になったり、スーパーのレジでお辞儀する際に、変な目で見られたり。20年
間あの街に住んでいたのに、自分が宇宙人であるかのような疎外感を感じる。他方、日本でも宇
宙人であることに変わりはない。外見で判断され「外の人」として見なされるから、「ホーム」
と言い切れるワケでもない。そして、昔から私の心の「ホーム」である母、姉、そして友人は
ここにはいない。でも、私の存在そのものを支えてくれる新たな心の拠り所、「ホーム」、すべ
てである選んだ夫と子どもはいまもここで、傍にいる。

日本にも私には大切な家族がいて、何もそこまで複雑ではないはずなのに、なぜか、この白い紙
を覗き、ハラハラしながら私の「ホーム」は一体どこにあるのか、「ホーム」というのは何か？
というのを考えてしまう。

高校を卒業して、早くあの小さいつまらない街から出たかった。12歳ぐらいからその瞬間を
待っていた。卒業後、まず5週間オーストラリアに旅に出てから、その後にジュネーヴに行って、
一年間、高校で一生懸命に学んできた大好きなフランス語を勉強しながら、住み込みでベビーシ
ッター、二人の子どもの面倒をみた。そこで知り合った日本人女性のおかげで日本語に興味を持
ち始めて、ベルリンで日本学を勉強することを決めた。大好きになっていたスイスが恋しくて、
1年半後にチューリッヒに移住。その後、大阪へ留学し、またチューリッヒにもどって、転々と
していた。定住しないことがとても気持ちよかった。そして2011年にチューリッヒ大学の日本
学部を卒業した後、2回目の留学に旅立った。1年半後に又チューリッヒに戻り、修士号を取得
するつもりでいたけれど、しかし、運命の歯車は別の方向に回ることになる。当初の予定とは異
なり、正式に東京外語大の修士課程に進学することになったのだ。その時に、今の夫に出会って、
知らないうちにますます、日本は留学地ではなくなり、定住地になってきた。

2011年に旅立った時には予想だにできなかった決定的な出来事は、もちろん子どもができたこ
と。2016年7月に京都の小さな助産院にて最愛の「渚」が産まれた。私は20年間ずっとドイ

ツにいたにもかかわらず、この子にドイツ語の名前を与えることは考えもしなかった。私たちのとても自然な物語の中で「渚」という名前がおりてきたのだ。

その渚ももうすぐ2歳になり、まさに幼児(**Infancy**)から抜け出して言葉を修得しようとする最中にある。毎日、その過程を観察するのは、面白くて仕方がない。自分の子どもがドイツ語より日本語を母語にしているということは、とても不思議な感じがするが、違和感はない。

そう考えると、どうみても「留学」を卒業してしまった。嬉しい反面、懐かしい気持ちにもなる。でも実は、今後どこに行くか、どこに住むか、どこが「ホーム」になりうるか、将来まだまだ様々な形の「留学」が待っているかもしれないと思うと、不安にもなるけれど、日本に「留学」しに来た時のあのワクワク感がどこからか改めて湧いてくる。結局人生のすべてが「留学」であるはず。知らない土地に行って、知らないことを学ぶという態度は一生忘れたくない。その気持ち自体が「ホーム」であるかもしれない。未知の輝きに満ちた瞳をもつこの可能性の塊を寝かしつけながら、ひしひしと私はそう感じ、想うのである。